慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ことわざの意味分析 : Les mauvais ouvriers ont toujours de mauvais outils
Sub Title	Une analyse sémantique du proverbe Les mauvais ouvriers ont toujours de mauvais outils
Author	喜田, 浩平(Kida, Kohei)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2011
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.101, No.2 (2011. 12) ,p.228(29)- 240(17)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	牛場暁夫教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01010002-0240

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ことわざの意味分析

— Les mauvais ouvriers ont toujours de mauvais outils —

喜田　浩平

はじめに

フランス語には副題に掲げたようなことわざがある。その意味を微視的に分析してみようというのが本稿のねらいである。「視点」や「話者」といった概念を導入し、フランス語話者が直観的に理解する内容をできるだけ明示的に記述してみたい。

二つのレベル

本題に入る前に、まずことわざ全般について観察される意味の二重性について触れておこう。一般に、ことわざの意味には二つのレベルを区別することができる。まずレベル1の意味は、文の規約的意味に若干の語用論的プロセスが介入して構築されるものである[1]。例えば La faim chasse le loup du bois ということわざのレベル1における意味は、おおむね「空腹はオオカミを森から追い出す（空腹になるとオオカミは森から出て来る）」というものである。レベル1の意味は特定のタイプの状況に適用される。

一方、レベル2の意味は、レベル1の意味が拡張され、より一般的な状況に適用されるものである。ことわざの「転義」として理解される意味はこのレベルに属する。先述の La faim chasse le loup du bois のレベル2における意味は、「誰でも必要に迫られると普段とは異なる行動を取る」というようなものである。レベル1では「空腹」という特定の状況が指向されていたが、レベル2ではこれを包摂するようなより一般的な状況（「必要に迫ら

れた状態」）が問題になっている。なお、このような意味の拡張がどのようなプロセスによって成立するのかという問題はここでは論じない。

レベル1とレベル2の区別は、「特定」と「総称」の区別には対応しない。いずれのレベルも「総称」である[2]。La faim chasse le loup du bois のレベル1における意味は、一般的な「空腹」を問題にしているという限りにおいて総称的である。これがレベル2で「必要に迫られた状態」を意味する場合も、やはり一般的な状態が問題になっている以上、総称的である。ただし、両者を比較した場合、前者は後者の一例であるという意味で「特殊」であると言えよう。

またこの区別は、発話の明示的意味と非明示的意味に対応するのでもない。ここで「明示的」と呼ぶのは、文の規約的意から直接的に導かれる発話の意味である。一方、「非明示的」とは、そのような明示的意味を入力とし、推論を経て導き出される発話の意味である。明示的意味と非明示的意味の区別は、関連性理論の explicature と implicature にほぼ対応すると言って良いだろう。（ただし、ここで言う明示的意味は真理条件を前提としていない。その限りにおいて、真理条件的な概念である explicature とは決定的に異なる。）さて、発話の明示的意味と非明示的意味の区別をこのように規定するならば、ことわざのレベル1とレベル2の解釈はいずれも明示的意味である。レベル1に関しては異存あるまい。レベル2に関しても、それがコード化されており、推論のようなプロセスが介入しない限りにおいて、「明示的」と考えざるを得ない。（ただし、レベル2の解釈は、その成立時点においては非明示的であったとは言えるかもしれない。）二つのレベルがどのような関係にあるのか（併存するのか階層構造をなすのか）、またそれぞれが文の規約的意味からどのように構築されるのかという問題にはこれ以上触れない。

なお、二つのレベルの区別が常に可能であるとは限らない。レベル1のみということわざも少なからず存在する。例えば La nuit porte conseil、あるいは L'argent ne fait pas le bonheur などはレベル1のみで、レベル2の意味は特に存在しない。一方、Après la pluie, le beau temps あるいは Il faut battre

le fer pendant qu'il est chaud、さらに Il n'y a pas de fumée sans feu や Il n'y a pas de roses sans épines などはレベル1とレベル2の区別が可能である[3]。

二つの解釈

ことわざの意味の二つのレベルが区別できたところで、具体的な分析に移ろう。ことわざ Les mauvais ouvriers ont toujours de mauvais outils は大別して二つの解釈が可能である。そしてそれぞれにおいてレベル1とレベル2の区別が可能である。まず一つの解釈は、レベル1において mauvais ouvrier であることと avoir de mauvais outils であることの間に含意関係が成り立つ、というものである。この解釈は「下手な職人はいつも粗末な道具を持っている」という日本語訳で明示化できよう。あるいは、二度用いられている形容詞 mauvais に日本語でも同じ表現を用いるならば「下らない職人はいつも下らない道具を持っている」もしくは「ショボい職人はいつもショボい道具を持っている」と訳せるかもしれない。いずれにせよ、緩やかながらも含意関係が成立している点がポイントである。

含意関係以外の要素が含まれているかどうかは微妙である。職人としての能力が低いがゆえに道具の見極めも下手で、その結果として手持ちの道具も粗悪品である、ということを意味するのであれば、「下手な職人である」ことと「粗悪な道具を持つ」ことの間に因果関係が成立すると言えよう。しかしこの点は本質的ではないので、これ以上議論しない。

レベル1で含意関係を意味する場合、Les mauvais ouvriers ont toujours de mauvais outils はレベル2でも同じく含意関係を意味する。ただし他のことわざ同様、レベル2ではより一般的な状況のタイプに言及し、「下手な職人である」ことを一例とするようなより包括的な「(あらゆる分野で) 能力が低い」ことを問題にする。

次の新聞記事では、見出しとして掲げられたこのことわざが、愚かな強盗が粗悪な道具（模造拳銃）を所有していたという事件を要約する機能を果たしている。ここではまさにレベル2における含意関係の解釈が可能である。(太字の強調は本稿の筆者による。以下同様。)

Les mauvais ouvriers ont toujours de mauvais outils

Objectif : le fast-food du coin, ou du moins sa recette dominicale. Arme : un revolver factice. Cerveau : aucun ! Un homme de 37 ans, déjà connu des services de police (on s'en doutait), s'en est pris à une employée d'un restaurant Quick marseillais qui prenait les commandes des clients servis dans leur voiture. La serveuse est parvenue à fermer le sas du local, dont le malfaiteur a alors tenté de briser la vitre avec son revolver. Sauf que celui-ci... s'est cassé, obligeant le braqueur à s'enfuir. Les policiers l'ont rapidement interpellé, avec de vraies armes cette fois. Le malfrat l'avait bien compris.

(*La Voix du Nord* 7/7/2011)

このことわざにはもう一つ別の解釈が可能である。レベル1で「職人が自らの仕事の不出来を正当化するため道具の悪さを根拠とする」という解釈である。『プログレッシブ仏和辞典』が「下手な職人は仕事の出来映えの悪さを道具のせいにする」(p.1011) と解説しているのはこの意味を反映している。また、*Dictionnaire des proverbes anglais-français / français-anglais* (Les Presses de l'Université Laval, 1998) が A bad workman always blames his tools (p.217) という英語のことわざと対応づけているのも同様である。

ところで、どうしてこのような解釈が可能なのだろうか。とりわけ、avoir de mauvais outils という動詞句がなぜ「道具の粗悪さを根拠として自己正当化する」という意味になるのだろうか。

この点を説明するには、「発話行為からの意味派生」(délocutivité) の概念が有効であろう[4]。この概念が一般化するのは次のような派生関係である。ある表現 E を発話すると、その発話行為とは異なる別の行為を間接的に遂行することがある。これを A としよう。E を発話しながら A を遂行する、ということが繰り返されるうちに、いつの間にか E が A そのものを意味するようになるのである。例えば、フランス語の動詞 remercier の「解雇する」

という意味（Pierre a remercié sa secrétaire「ピエールは秘書を解雇した」）はこのようなプロセスを経て獲得されたものと推測される。上司が部下を解雇する場面で、Je vous remercie と発話したとしよう。この段階で remercier は「感謝する」という意味である。しかしこの発話行為そのものが解雇という行為の遂行と受け取られたとしよう。つまり、Je vous remercie と発話することがすなわち「解雇」なのである。このような状況が繰り返されるうちに、動詞 remercier が「解雇する」を意味するようになったと考えられる。

職人のことわざにおける動詞句 avoir de mauvais outils も同様である。ある職人が出来の悪い仕事をして、J'ai de mauvais outils と発話することで自己正当化したとしよう。また別の職人も同じような状況で同じ文の発話によって自己正当化したとしよう。このような状況が繰り返されるうちに、動詞句 avoir de mauvais outils が「自己正当化する」という行為そのものを意味するようになるのである。

自己正当化の解釈は、ことわざのレベル2でも可能である。その場合、下手な職人ではなく一般に質の低い仕事をした人間が問題となる。フランス語の辞書の記述はこの点を反映している。いずれも Les mauvais ouvriers ont toujours de mauvais outils のパラフレーズである。

> On a toujours de bons prétextes pour ne pas bien faire un travail. (*TLF*)
>
> On s'excuse d'un mauvais travail en alléguant les moyens mis à sa disposition. (*Petit Robert*)
>
> On trouve toujours une bonne raison à alléguer pour se justifier d'un travail mal fait. (*Dictionnaire de l'Académie française* 9e édition)

また、以下の引用は、語り手の女性が裁縫が苦手であるという状況で、道具（針）に対する不満を示唆すると教師が（語り手の祖母と同じように）ことわざによって窘めるという場面である。

[...] j'éprouvais une certaine allergie pour les travaux d'aiguille. « Tu fais des aiguillées de paresseuse », me disait la maîtresse en me voyant dévider des kilomètres de fil, ou bien, comme ma grand-mère à la maison : « **Les mauvais ouvriers ont toujours de mauvais outils** », quand le chas n'était jamais assez gros à mon gré.

(Thérèse Bresson, *Le vent feuillaret*, Éditions Seghers, 1980, p.95)

以上でことわざLes mauvais ouvriers ont toujours de mauvais outilsの二つの解釈の輪郭は明らかになった。それでは、解釈2の意味をさらに掘り下げてみよう（議論はレベル1に限定する）。

視点

解釈2（レベル1）が成立するためには少なくとも二つの異なる視点の存在が不可欠である。便宜上、視点$_1$と視点$_2$と呼ぶことにしよう。視点$_1$は職人側の視点である。職人そのものの視点と考えても差し支えないし、職人とは異なるが職人に共感したり同化したりする主体の視点と見なしてもよい。一方、視点$_2$は反–職人側の視点である。職人集団の外部に位置し、それを観察し、判断を下す視点である。職人に反感を抱いているとか、その態度を快く思っていないとか、そのような心理的なことは関与しない。重要なのは、視点$_2$が職人からは距離をとったところに位置し、視点$_1$とは対立し、両者が対峙する形で方向づけられている点である。

二つの視点の対立は二つの形容詞 mauvais の意味の違いに顕著に表れている。mauvais のような価値判断を含む語では、神の視点を想定するのでない限り、「誰がそのように判断したのか」という点が決定的に重要である。動詞句 avoir de mauvais outils の中で道具を mauvais と判断しているのは視点$_1$である。本質的に mauvais である道具というものは存在しない。仮に高価で性能も優れており、超一流の職人の使用にも耐えるような道具であっても、それを用いて出来の悪い仕事をした職人が J'ai de mauvais outils と自己正当化した瞬間、その道具は当の職人の視点からは、そしてその視

点においてのみ、mauvais なのである。

一方、そのような職人を mauvais と判断するのは視点$_2$である。やはり本質的に mauvais である職人は存在しない。誰かが mauvais と判断した瞬間、その職人は mauvais になるのである。仕事の出来が悪いからその職人は mauvais なのか、それとも自己正当化するから mauvais なのか、それともその両方なのかは問わない。いずれにせよ、職人を mauvais と判断するのは視点$_2$である。

それぞれの視点が mauvais と判断する対象（道具と職人）は、逆の視点からは mauvais と判定されることはないだろう。視点$_2$から mauvais という烙印を押された職人たちは、自らを mauvais と形容するのは不本意であろう。視点$_1$が mauvais と呼んだ道具に対して、視点$_2$はそのように呼ぶことに必ずしも賛同しないであろう。

このような「視点」の独自性を強調するため、認知言語学の「視点」と比較してみよう。

認知的「視点」は視覚的イメージを集約する空間的な位置を指すことが多い。籾山（2009、第7章）は日本語の「行く / 来る」、「あげる / くれる」、「売る / 買う」などの動詞の意味の違いを、移動する人やモノを捉える「視点」の違いに関連づけている。また、対象が静的な場合でも同様である。「名古屋から東京まで高速道路が走っている」と「東京から名古屋まで高速道路が走っている」の違いは、「名古屋・東京間に高速道路が存在する」という状態に対して異なる捉え方をし、異なる方向に「視線を走らせる」ものと分析している。いずれにせよ、このような「視点」は事物によって構成される世界の存在を前提としており、それをどのような位置や角度から把握するのかということが問題になる。

一方、職人のことわざの「視点」は、このような認知的「視点」と少なくとも二つの点において大きく異なる。

まず、ことわざの「視点」にとって空間的な位置関係は本質的ではない。一見すると、それは職人の言動を映し出すカメラのようなものにすぎず、認知的「視点」と実質的には同じものであるような印象を与えるかもしれ

ない。しかし二つの形容詞 mauvais の分析で強調したように、ことわざの「視点」は価値判断を下す審級である。認知的「視点」はすでに存在する事物の視覚的イメージをカメラのように取り込むものであるのに対し、ことわざの「視点」は事物を視覚的に取り込むことが本質ではない。むしろそこにおいて価値判断がなされることで、意味が生成する場、意味が立ち現れる場となる。

ただし、籾山（2009）は、認知的「視点」が「異なる価値づけ・意味づけ」をする可能性を示唆している（p.64）。また、「心理的な視点」という項目を立て、スポーツの試合で同じ場面を「チャンス」または「ピンチ」と見るケースを分析している。このような意味での「視点」は職人のことわざの「視点」と何らかの類縁性があるかもしれない。しかし籾山は例を列挙するだけで詳細な定義や説明を提示しないため、これ以上の比較は無理である。

もう一つの違いは、認知的「視点」が基本的には一つの発話につき一つしか存在しないのに対し、ことざわの「視点」は複数存在する、という点である。認知的「視点」は一元的に事物を把握するのみである。ちょうど一台のみの定点カメラで風景を撮影しているようなものである（それが移動したり反転したりする可能性は排除されない）。これに対し職人のことわざに「視点」は少なくとも二つ存在する。それは多元的かつ複眼的なのである。一つの対象を二台のカメラで撮影し、二つの映像を組み合わせて対象を立体的に再現しているようなものである。あるいは複数の映像のモンタージュと考えてもよい。（ただしこのアナロジーはミスリーディングである。既に述べたように、ことわざの「視点」は必ずしも視覚的なものではないからである。）

話者

二つの視点の存在と両者の差異は以上で明らかになった。では、それぞれが「話者」と取り結ぶ関係について考察してみよう。ここで「話者」というのは、ポリフォニー理論における「発言主体」（sujet parlant）と「話

者」(locuteur) の区別を踏まえている[5]。「発言主体」とは実際に音声を発する主体であり、生理学的・心理学的・社会学的に規定される主体である。一方、「話者」とは発話の意味の責任主体であり、その内容を請け負う主体である。話者は理論的に構築される存在であり、それに対応する人物が実在するかどうかという点は本質的ではない。

発言主体と話者(に対応する実在の人物)は結果的に重なり合うことも多いが、両者が乖離するケースも存在する。後者の最もわかりやすい例は、演劇における役者と登場人物の関係であろう。例えば、コメディー・フランセーズでモリエールの『スカパンの悪だくみ』が上演され、スカパンをフィリップ・トレトン (Philippe Torreton) が演じたとしよう。そして第1幕第2場でスカパンの最初のせりふ、« Qu'est-ce, Seigneur Octave, qu'avez-vous ? » が発せられたと想像しよう。このせりふの発言主体は生身の肉体を持つ役者トレトンである。一方、その話者は登場人物としてのスカパンである。このケースの話者は架空の人物であるが、そうでないケースもある。例えば、ある携帯電話会社のテレビ CM で、女性タレントが「いま契約すると、通話料はタダです」と言ったとしよう。この「いま契約すると、云々」という発話の発言主体は女性タレントである。しかしこの女性タレントが発話の内容の責任を負うわけではない(通話を無料にすることの経営的責任はない)。つまり話者ではない。この発話の話者は携帯電話会社である。

発言主体と話者の区別を職人のことわざで確認してみよう。まず、ここでは発言主体と話者は一致しない(この点はすべてのことわざに一般化できる)。このことわざをピエールが発話すれば発言主体はピエールであり、ジャンが発話すれば発言主体はジャンである。しかしこのことわざは特定の発言主体の発話とは独立に(あるいはそれ以前に)存在し、それ自身で意味を持つ。したがってその意味を請け負う主体である話者を発言主体と同一視することはできない。ではそのような話者は誰なのか、という問題が生じるが、その特定は容易ではない。単純に考えれば、このことわざを歴史上初めて発した人物がそのような話者ということになるだろう。また、

このことわざがフランス語文化の共有財産となった現在では、わざわざ特定の話者を想定する必要はないかもしれない。いずれにせよ、ここで重要なのは発言主体と話者が一致しないという事実である。

さて、このような話者と二つの視点の関係はどうなっているだろうか。話者は視点$_1$と対立し視点$_2$と同化する、と分析するのが妥当であろう。なぜならば、ことわざの全体的意味は明らかに職人を貶めるように方向づけられているからである。このような意味を引き受ける話者が中立的な立場で二つの視点を比べているとは考えられない。視点$_2$により強くかかわり合っているはずである。(ただし、話者は視点$_1$と対立するもののそれを破棄したり拒絶するわけではない。もしそうならば、そもそも発話の中にそのような視点を導入する必要がなくなるはずである。導入された視点に対立することで、いわばそれを揶揄するような効果が生じるのである。)

自己正当化の解釈が、このように拮抗する二つの視点と話者の緊張関係の上に成り立っているとするならば、そこから興味深い帰結を導くことができる。

まず発話行為からの意味派生について。上記の論述では、それがあたかも中立的な次元で成立しているかのように記した。しかし実際は、ここでも対立する視点が重要な役割を果たしている。ポイントは「avoir de mauvais outils と発話することによって遂行される行為(自己正当化)が、この動詞句の新しい意味になる」という点であった。しかし、そのような意味が誰にとって新しい意味となるのであろうか。明らかに視点$_2$にとってである。職人の発話行為が視点$_2$にとって「自己正当化」と映るからこそ、このような意味が派生するのである。ある職人が J'ai de mauvais outils と発話することで自己正当化したとして、当の職人にとって avoir de mauvais outils という動詞句は規約的な意味しか持ち得ない。この動詞句が「自己正当化する」という新たな意味を獲得するのは、あくまでも視点$_2$においてである。

最後にもう一点。二つの視点の区別が存在せず、中立的で単一的な視点のみからことわざが解釈されるとどうなるだろうか。これこそまさに含意関係の解釈ではないだろうか。同じ視点から職人も道具も mauvais と判断

する場合、両者は同じ地平に共存することになる。これはいわば論理的な空間である。そこは平板な論理的関係（その一つが含意関係）が成立する空間である。あるいは、二つの視点の区別は維持しつつ、話者が両方の視点と均等に同化するという状況を想像しても結果は同じであろう。

結論にかえて

フランス語話者がことわざ Les mauvais ouvriers ont toujours de mauvais outils を理解するとき、その理解される内容は実に多様で、錯綜していることが明らかになった。まず、大別して二つの解釈が可能である（「含意関係」と「自己正当化」）。そして他の多くのことわざ同様、それぞれに二つのレベルを区別することができる。自己正当化の解釈（レベル1）をさらに分析すると、述語は発話行為からの派生により新しい意味を獲得している。そして二つの視点が対立し、それぞれが話者と様々な関係を結んでいる。

この分析をさらに精緻なものにするには、「視点」の概念に磨きをかける必要があるだろう。そのためには、例えばポリフォニー理論の「発話者」(énonciateur) と比較すると実り多い結果をもたらすだろう[6]。発話者とは、発話の意味の中に区別される様々な内容の一つ一つを請け負う責任者である。ただし発話者は意味内容の外部に位置すると考えられている。一方、本稿の「視点」はむしろ意味内容の内部にあり、意味の構成要素であると考えられる。両者の区別については稿を改めて論じたい。

注

1　Tamba（2000）は sens phrastique / sens formulaire という用語によってことわざの二つのレベルの意味を区別し、前者についてはあたかも語の規約的意味の集積のみによって生じるかのように述べている（p.42）。しかしこれはミスリーディングである。Recanati（2004）が論じているように、いわゆる「字義通り」の意味にもコンテクスト的要因は不可欠である。とはいうものの、Recanati は「字義通り」の意味を「命題」や「真理条件」に還元しているが、後の議論で明らかになるようにことわざのレベル1の意味がそのようなものであるかどうかは大いに疑わしい。

2　ことわざの総称的性質については Anscombre（1994）、Kleiber（1994）（2000）、Perrin（2000）参照。

3　L'argent ne fait pas le bonheur がレベル1の意味しか持たないのに対し、Il n'y a pas de roses sans épines は二つのレベルで意味を持つという点は、Carel & Schulz（2002）に同趣旨の指摘がある。

4　以下の議論は Ducrot の分析から着想を得た。Ducrot & Schaeffer（1995, p.610）参照。

5　言語学においてポリフォニー理論を体系的に発展させたのは Ducrot（1984）である。それ以降の展開の総括と新しい地平については Ducrot（2001）、Ducrot & Carel（2006）参照。Ducrot のポリフォニー理論の基本的問題意識を要領よくまとめ、独自の見解も加味したものに Anscombre（2005）（2006）がある。より簡潔な形で紹介したものとしては Recanati（2008）が秀逸である。理論構築の最前線で斬新なアイデアを提案しているものとしては Carel（2011, ch.8, ch.9）が興味深い。

6　ポリフォニー理論の「発話者」の初期形態については Ducrot（1984）参照。その後、発話者の属性は何か、話者との関係はいかなるものか、またそもそも発話者という概念は必要ないのではないか、という問題が激しく議論された。その経緯については Ducrot（2001）、Carel（2008）、Carel & Ducrot（2009）参照。最も新しい「発話者」の概念は Carel（2010）（2011）で提示されている。

参考文献

Anscombre, J.- C. 1994. « Proverbes et formes proverbiales : valeur évidentielle et argumentative », *Langue française,* 102, p.95-107.

Anscombre, J.- C. 2005. « Le *ON*-locuteur : une entité aux multiples visages ». In Jacques Bres et al. (eds.), *Dialogisme et polyphonie : approches linguistiques*, Bruxelles, Duculot, p.75-94.

Anscombre, J.-C. 2006. « Stéréotypes, gnomicité et polyphonie : la voix de son maître ». In Laurent Perrin (ed.), *Le sens et ses voix : dialogisme et polyphonie en langue et en discours*, Université Paul Verlaine - Metz, p.349-378.

Carel, M. 2008. « Polyphonie et argumentation ». In M. Birkelund et al. (eds.), *L'énonciation dans tous ses états. Mélanges offerts à Henning Nølke*. Bern, Peter Lang, p.29-46.

Carel, M. 2010. « Note sur la présupposition ». In Marion Colas-Blaise et al. (eds.), *La question polyphonique ou dialogique en sciences du langage. Actes du colloque Metz-Luxembourg 2008*. Université Paul Verlaine - Metz, p.157-174.

Carel, M. 2011. *L'entrelacement argumentatif*. Paris, Honoré Champion.

Carel, M. & O. Ducrot. 2009. « Mise au point sur la polyphonie », *Langue française*, 164, p.33-43.

Carel, M. & P. Schulz. 2002. « De la généricité des proverbes : une étude de *l'argent ne fait pas le bonheur* et *il n'y a pas de roses sans épines* », *Langage et société*, 102, p.34-71.

Ducrot, O. 1984. *Le dire et le dit*, Paris, Éditions de Minuit.

Ducrot, O. 2001. « Quelques raisons de distinguer "locuteurs" et "énonciateurs" », *Polyphonie — linguistique et littéraire*, III, p.19-41.

Ducrot, O. & M. Carel. 2006. « Description argumentative et description polyphonique : le cas de la négation ». In Laurent Perrin (ed.), *Le sens et ses voix : dialogisme et polyphonie en langue et en discours*, Université Paul Verlaine - Metz, p.215-241.

Ducrot, O. & J.-M. Schaeffer. 1995. *Nouveau dictionnaire encyclopédique des sciences du langage*, Paris, Éditions du Seuil.

Perrin, L. 2000. « Remarques sur la dimension générique et sur la dimension dénominative des proverbes », *Langages*, 139, p.69-80.

Recanati, F. 2004. *Literal Meaning*. Cambridge, Cambridge University Press.

Recanati, F. 2008. « D'un contexte à l'autre », *Cahiers chronos*, 20, p.1-14.

Kleiber, G. 1994. *Nominales : essais de sémantique référentielle*, Paris, Armand Colin.

Kleiber, G. 2000. « Sur le sens des proverbes », *Langages*, 139, p.39-58.

籾山洋介 2009.『日本語表現で学ぶ入門からの認知言語学』，東京，研究社.

Tamba, I. 2000. « Le sens métaphorique argumentatif des proverbes », *Cahiers de praxématique*, 35, p.39-57.